

## 【講演】 世界の飢餓を救うために—支援の現場から—



国連・WFP日本事務所代表  
焼家 直絵 氏

ご紹介ありがとうございます。国連・WFP日本事務所代表の焼家直絵です。今日は世界で今問題となっている飢餓状況がどういったことになっているか、また国連の組織の一つであるWFP、国連世界食糧計画、World Food Programmeがどのような活動をしているか、現場での活動がどのように行なわれているのかについてまずお話しさせていただいて、最後に国連職員にはどのようにしたらいいのかということと、皆さん国連職員を目指している方もおられると思いますので、もし何か参考になることがあればという観点から、どういった人が社会人として求められるのか、また学生時代に何ができるか、そういったこともお話しさせていただきたいと思っています。

### 【WFPと世界の飢餓】

まず国連世界食糧計画ですが、世界最大の人道支援機関です。国連機関としていろいろな途上国もしくは先進国で活動をしている機関はさまざまあります。その中でWFPは、国連唯一の食料支援機関で飢餓の撲滅を使命として食料支援を行っており、年間予算規模も9000億円ほどあります。世界83か国で約9000万人以上に対して食料支援を行なっています。1961年に設立され、イタリア、ローマに本部を置いています。約1万5000人の職員が働いており、90%の職員はフィールドで勤務しています。日本人職員も76人勤務しています。

SDGsについて聞いたことはありますか。SDGsというのは持続可能な開発目標として国連で採決された17の目標です。WFPはそのうちの「飢餓をゼロに」という2番目を主に目標と定めています。また17番目の「パートナーシップで目標を達成」ということで、他の国際機関、民間組織、政府などと共にこの飢餓ゼロを目標として活動をしています。世界における飢餓の現状ですが、過去3年増え続けていまして、現在8億2100万人となっています。昨年比600万人増で、主な原因は武力紛争、そして気候変動の影響が追い打ちをかけています。これは全世界の人口の9人に1人が飢えに苦しむ状況です。

イエメンとかシリアなどの中東では紛争によって住むところが奪われ、国内避難民となって避難生活をしている人がまだまだたくさんいます。紛争によって食料がなくなって飢餓状況に陥っている人もいれば、紛争の影響によって国内で食物価格が上がり、経済的にひっ迫して食料を購入することができなくて飢餓状況に陥り飢餓人口が拡大しています。ですから人々を食べさせることができるだけの十分な食料が世界にはこの地球上にない、そういうわけではないんです。ニーズに対して食料が世界では足りていない、そういうわけではないんです。気候変動は皆さんも日々最近感じているのではないのでしょうか。日本では干ばつで水がなくなり農業ができないところはあまりないのですが、アフリカでは干ばつによって砂漠化し農業ができなくなり、人々が移住して飢餓状況に陥ることが今増えています。また雨が異常に降って洪水になり、飢餓状況に陥っている人が増えている状況です。そのことによって栄養失調に陥っている人もいる状況にあります。ですから9人に1人が今飢えに苦しんでいる、そういった状況にあります。特にその

中でも1億2400万人が深刻な飢餓状況にあり、緊急に食料支援を必要としています。食料危機予防のためには、政治的安定、教育向上など、地域別にさまざまな問題を解決する必要があります。最近画期的な国連安全保障理事会の決議が採択されました。国連安全保障理事会は、食料安全保障が平和と安全保障をもたらす上で不可欠な要素であると認識しています。飢餓リスクを増大させている紛争地域での人道アクセスの確保を要請しています。この決議にみられるように、食料、飢餓状況というのは紛争、平和と密接に絡みあっていまして、ここを解決することが平和への礎にもなると考えております。

WFPは、先ほど83カ国と申しましたが、アジア、アフリカ、南米、中東など、さまざまな地域で活動していますが、やはり飢餓問題となるとアフリカ、中東がかなり多いんです。WFPは食料配布による支援、また栄養強化、栄養失調に対する人の栄養強化支援だけではなくて、ロジスティクス、物流と緊急通信網のリード機関でもあります。それはどういうことかといいますと、他の組織、国際機関だけではなくNGOとか他の政府組織の支援物資などもWFPが保管して運搬する物流のリード機関としての役割も果たしています。そのために世界何か国にも人道支援本部を設けていまして、他の機関の医薬品、テントなどを保管し、必要に応じて72時間以内に配布できる状況になっています。

皆さんの中で地震、災害の被災者に対するボランティア活動をしたことがあるとか、実際に自分も被害に遭われたことがある方もおられるかもしれませんが、地震などが起きた時に一番最初に不便に感じるのは通信網が遮断されることだと思います。そうした場合にいち早く行って特別な緊急通信網を設置しインターネットなど、ライフラインに繋がる通信ができるようにする部隊も当方にはあり、何かあったときに72時間以内に入って緊急通信網を確立することも行なっています。

食料支援というと食料を配って終わりと思っておられるかもしれませんが、そうではなくて、食料支援を通して多様な成果が生まれるといいますか、食料支援を通して教育、食料支援を通して環境、食料支援を通して貧困解決など、さまざまな目的をもって行なっています。WFPは、究極的には、WFPがいなくてもそれぞれの国がやっていける世界を作っていきたいというのが目標ですので、依存の世界を作るとはWFPの意図している支援の仕方ではないので、その生活設計、生活の途上国の人々の生活の自立へ向けた支援をいつも心掛けています。

まず緊急食料支援、これが王道的な皆さんがイメージするような支援ですが、まさに災害があった時とか、いきなり難民、避難民になった人とか、そういった人々はなかなか難民キャンプとか、移動の自由がなく自分で自立した生活ができない。そういった緊急的な要素があるところで緊急食料配給を行なっています。この栄養強化事業は妊産婦、子どもなど栄養失調に苦しむ人に対して栄養価の高い食料を配ることによって栄養強化をする活動をしています。そのためには特別な栄養素を配合したビスケットとか粉状のものを配ったりしています。コミュニティー支援ですが、まさにこの辺りが自立に結び付くような生活向上のための生計支援ですが、例えば労働の対価としての食料支援としてインフラ整備だとか何か仕事をする人に対して食料支援をするということで、収入向上につながる支援も行なっています。こちらが学校給食ですが、多分学校給食というのが皆さん一番イメージをしやすいのではないのかなと思いますが、途上国では家で子どもが労働者として必要とされていたり、貧しいために学校に行かせてもらえないという子どもがかなりいます。学校に行けば給食があるので、学校に行けば食べられるということで学校に来る子どももいまして、そういった子どもを学校に行かせることを目的として学校給食というのを行なっています。これが食料引換券、現金支給ですが、WFPは現金、食料引換券を配るのかと思われる方もいるかもしれませんが、場所によってはお店とかにちゃんと食料があるところもあります。そういうところでは食料引換券を渡し、指定されたところで指定されたものと引き換える、そういうことも行なっています。その理由は、WFPは例えばトマトとかキャベツとか何日かしてすぐ腐ってしまうようなものは配っていません。食料の幅を広げるため引換券によって特定の決まった品目の中から食料と引き換えてもらう支援もできる場所ではやっています。まだ僻地ではこういった支援はできないのですが、こういった支援も

可能です。例えばヨルダンにシリアから難民が何万人も行っていますが、ヨルダン自体はすごく貧しい国ではないので、ヨルダンにいる難民キャンプの難民が近くのお店に行って引き換える。そのことによってヨルダンの現地人も食料を買ってもらえて潤うので、そういった形での引き換え支援を行なっています。

政府パートナー能力強化支援も行なっていて、いずれWFPのノウハウというのを各国政府に引き継いでもらって自分たちで運営してもらいたいという思いがあるので、政府の関連しているパートナーとか、その国の人々の能力強化支援、そういったことも行なっています。主なWFPの食料品目ですが、米、小麦、豆類、砂糖、塩。これが栄養強化の栄養素を配合したパウダー。こういったものを配布しています。随分前に東北大震災がありましたけども、そのときも栄養強化ビスケットを配ったことがありました。この栄養改善というのが非常に大事なのですが、食料支援で女性の地位向上、そういったことを考えると、栄養改善というのをいろいろな活動に取り入れるようにしています。この母子保健支援ですけれども、特に最初の1000日が鍵となっています。ここで出遅れるともうかなり取り戻すのが難しく、生命を受けてから最初の1000日間の栄養状況はその後の健康や脳の発達に大きく影響しています。ここでかなりの栄養失調になると、脳も普通の子どもより小さかったり、発育不良で背も低いままで小学校、中学校になっても小さいとか、なかなかこれは取り返せないのが、最初の1000日間は非常に重要と考えています。そのために妊婦、授乳中の母親に対する適切な栄養教育を行なっています。妊婦、2歳未満児とその母親に対してビタミン、ミネラルを含んだ栄養強化食品を提供しています。先ほど言いました生活支援、自立に向けた支援ですが、小規模農家からの食料購入支援もやっています。日本でも農家の方への支援なども行われていると思いますが、途上国での特に大きな問題というのは、やはり小規模農家がかかり搾取され貧しいままという状況が続いていたりですが、やはり農業がその国の主な収入源なので、この小規模農家の底上げというのが重要なのです。WFPはこの小規模農家から直接食料を購入したり、小規模農家が市場、マーケットへのアクセスがもっと得られるように支援したりとか、小規模農家の人たちが農作物を売るときの中間搾取を失くすための支援などの能力強化支援を行なっています。

日本では食べ残して多くの食品ロスが発生しているという状況ですが、途上国では流通する前に食料ロスが40%もあり、それは保管方法が悪いとか保存する倉庫がないだとか、ちゃんとしたバッグに詰めることができてないとか、基礎的なことでかなりのロスが起こっているのが、食品ロスを防ぐために能力強化支援を行います。具体的には、実際に倉庫を建てたり、バッグや詰める機械も提供したりしてロスを少なくする支援も行なっています。気候変動に強い灌漑設備支援も行なっています。特にアフリカのサハラ地域辺りでは、従来の灌漑農業もできないところが多いので、WFPが技術を導入し、水はけを良くして農業ができるようにする支援も行なっています。それで従事する人々に対して食料支援を行なうことによって、インフラ整備、灌漑設備、何か工事をする人に対しては食料または現金を配布するので収入向上にもなり、後々コミュニティの生活向上にもなる支援も行なっています。

シリアでは養蜂支援による職業訓練支援を行なっています。女性に対しての、チーズ加工技術の職業訓練支援など、WFPはジェンダーもプロジェクトの中に盛り込んで行なっているので、女性の半分以上がこうした活動に参加できるように心掛けています。環境問題の改善にもつながる植林支援も行なっています。

先ほど申し上げました物流ですが、海上、陸上、航空輸送など、かなりの規模で物流支援を行なっています。他の機関の物も運んでいるのでかなりの分量になりますが、1日平均飛行機70機、船20隻、トラック5000台で輸送に当たっています。あと国連人道航空サービスというんですが、民間航空機が入れないようなところが結構あり、陸の孤島にならないように、人道支援に携わる人がその場所に行けるように、またそこに物資も運べるように、国連機関だけではなく、政府の人、NGO、開発人道支援に関わる人すべてを代表して国連人道支援航空サービスを行い、人々の手と足となっています。国連人道支援物資、備蓄庫ですが、世界にパナマ、イタリア、スペイン、ガーナ、ドバイ、マレーシアにあり、ここを拠点とし

て72時間以内にそれぞれ一番近い災害地域に、いろんな組織の物資を代表して保管して運ぶことも行なっています。ですから物流は強いというのも実は当方の特長でもあります。東北の大震災や熊本の震災があったときも、マレーシアからテント型の倉庫を運んで設置しました。特に東北の大震災のときは、各国の支援物資が羽田に届いても、そこから先が問題だったので、羽田から被災地に運びテントを建てることで貢献させていただきました。私自身もそのときは宮城県に入ってそういった支援の調整をしていたこともあります。

イノベーションのことについてもお話しさせていただきたいと思います。当方の支援は物流、食糧支援にはイノベーションを活用していきまして、デジタル化を行なっています。ブロックチェーンを活用したビルディングブロック事業というのをやっています、例えばヨルダンのシリア難民キャンプですが、現金支給のときに使っています。この現金支給はeバウチャーといって、デジタル化して難民の状況を登録しておきます。光彩認証なのですが、目で認証をして、目をカメラに近づけるとその人のデータが出てきます。その人の家族は4人だから4人分の食料と引き換えられるというデータが出てくるのです。こういったシステムの導入にブロックチェーンを活用しています。主にヨルダンのシリア難民キャンプで11万人の難民を対象に実施しています。今後ヨルダン国内に居住する約50万人のシリア難民に支援を拡大する予定です。このイノベーションによってより効率的に支援を行なうことができますし、透明性、秘匿性が高くなり、トランザクションコストがほぼゼロになり、セキュリティープライバシーの確保ができる利点があります。今のところ2100万ドル、90万回の取引実績があり、銀行との取引費用を98%削減することができました。物流の分野でもこういったイノベーション、ビルディングブロックを使う予定でして、それにより物資の見える化といいますか、どこにどのように運ばれているのかももっと分かりやすくなります。食料サプライチェーンにおける中間手数料の削減、物資の目的地への搬入の見える化を目指し、ブロックチェーン流通の導入を検討しています。

### 【私の現場活動】

次に、実際に現場でどのような活動をしていたかについてお話しさせていただきたいのですが、私はもともとWFP本部から始め、私の組織の本部はローマにあるのですが、ローマでは国際機関調整官の仕事をしていました。その後ブータンにプログラムオフィサーとして、現場の活動を監督しに行きました。ブータンでは学校給食が主でしたが、山間の国なので道路で運べないところが多く、ヤクやロバを使って運んでいました。私の仕事は運ぶことではなく、食料が滞りなく学校に届いて学校給食が不正もなく運営されているのか、必要とされている人の特定をしプロジェクトのデザインをし、それがうまく執行されるのを監督することでした。

子どもたちは家では貧しくて食べられないのですが、学びたいという気持ちがすごく強く、2時間かけてでも歩いて学校に通ってきます。お腹がすいたままでは集中力がなくなるので、給食を食べることによって子どもの学習能力が上がるという効果も見受けられます。次に西アフリカのシエラレオネですが、私があるシエラレオネにいたときの活動をお見せしようと思います。シエラレオネには副代表と事業責任者として赴任しました。リーダーシップ、マネジメント、プログラム管轄、渉外、調整、そういったことが求められている職種でした。私が行っているときにエボラ出血熱が始まり、その最後までいました。エボラ出血熱は高熱が40度くらい出て出血し、わりと短い期間で亡くなってしまいう不気味な病気です。目に見えない病気ですし、飛沫感染するわけではないのですが、人と接触すると感染するリスクが高まります。この人がエボラだと外から見てすぐ分かるわけではないので、運が悪いとかかかってしまうという不気味さがあり、細心の注意を払わなければいけないという病気でした。世界中でパニックになり、私があるときにも民間の飛行機が止まってしまい出入りができなくなりました。WFPが国連人道支援航空を近隣諸国に飛ばし、それで人道支援機関に携わる人が行き来できるという状況になっていました。

最初の頃はそんなにひどくなく、日本に休暇で帰ったのですが、私がシエラレオネに戻って一週間後に普通の民間航空機が止まってしまい、大変なパニック状況でした。私はその当時、エボラの感染地域とエボラ治療センターにいるエボラ患者に対する食料支援を行なっていました。エボラの感染地域にいる人が動き回ることによって感染が拡大してしまうので、感染の拡大を防ぐために感染地域で食料支援を行なえば、人々が食料を求めてマーケットなどに動くことを防ぎ、さらなる感染防止となるために感染地域などでも食料支援を行なっていました。どのように食料支援をし、どのような状況だったのかが分かるビデオがあるのでお見せします。ちなみにこれは、に池上彰さんの番組で、それに出演したときのビデオです。

着ているものを見ていただくと分かると思うんですが、長袖長ズボンで感染のリスクを防ぎ、手で人に触れることは避けています。これはエボラ感染者が確認された家に食料支援に行っている時ですが、患者が出た家は家族ごと隔離されているのでまったく食料がない状況です。私はそういう、食料支援、届けに行く役目といえますか、滞りなく行くように監督する役目なのです。

次にミャンマーに話を移します。ロヒンギャ問題について聞いたことがあると思いますが、私は昨年5月までミャンマーの副代表として勤務しておりました。ラカイン州北部ですが、80万人ほど難民としてバングラデシュに流出しましたが、まだ約18万人の国内避難民がいますので、その人たち全員に食料支援を行なっていました。なぜ全員に食料支援を行なっているかという、暴力事件が起きた後、掃討作戦もあり、経済活動ができないこともありますし、ミャンマー側で食料支援をすることによってさらなる難民を流出しない抑止力にもなるというところもあります。それだけではなく女性と子どもを含む18万人に対して食料栄養支援も行なっています。入城が可能などころでは、家庭菜園による果物、野菜栽培技術などを女性に訓練したりとか、灌漑水路建設などコミュニティーのインフラ整備、そういった支援も行なっています。学校が再開された場所では学校給食を行なっています。ミャンマーラカイン中部に話を移しますが、ラカイン中部でも約12万人の国内避難民がいて、そこから出られない状況です。2012年にミャンマーのイスラム教徒と仏教徒との間で武力衝突が起これ、宗教観の対立が根強く残っているということで、食糧支援を行なっています。ここでも栄養支援を実施していますし、ミャンマーは結核患者が多いのでそういった方にも栄養支援を行なっています。また学校給食だとかダムの修復などのコミュニティーインフラ整備も行なっています。もともとこのラカイン州というのはお米の生産ができるので、ここでWFPが支援する40%の食料を調達しています。

これがその避難民のところを視察に行ったときの写真で、こういったところで多くの犠牲になるのは女性なので、特に女性に対してはカウンセリングをしたり栄養を指導するなど手厚い支援を心掛けています。これが避難民の女性を視察に行ったときの写真で、ミャンマーのムスリム、イスラム教の人たちは言語に書く文字がないんです。口頭だけなんです。ですから絵を使いながら母乳が大切だとか家でどういった食生活をするのが大切だとか、そういったことを女性に対してカウンセリングなども行なっています。食料を配るだけでは駄目なので、家でどういった生活をするかが大事なので、家での栄養指導、食生活の指導なども行なっています。バングラデシュですが、ミャンマーから大量の避難民が流入し、約100万人の避難民と20万人の受け入れコミュニティーに対して支援を行なっています。コックスバザールというところに難民が集中し、未だ帰還するめどが立っていません。ここで食料支援も行なっていましたけども、このように技術を使って、先ほどブロックチェーンのところでお話ししましたが、これは顔認証ですね。顔認証で決められたところに行って食料と引き換え、食料支援を行なっています。難民キャンプに橋を造ったり建物を造ったりとか、そういったことに従事する人への食料支援も行なっています。これがコックスバザール、バングラデシュの避難民キャンプでの食料支援の現場で、ここにきていろんな決まったものと引き換えてもらうということになっています。決まったものと引き換えるので、お酒を買ったりとかはできません。ここで、分かりますかね。こういうふうに豆とかいろんな品目があって、主に女性が引き換えに来ます。ここで何に引き換えられるか品目が書いてあります。雨季の前には国内避難民の労働力を

活用してキャンプ内の上下水道を整備したり、道路が無く、道無き道に行くという感じだったので、道路の整備をすることも行なっていました。またここでも大型倉庫を運用したり橋を架けたりして物流の支援も行なっています。ここがコックスバザールの避難民キャンプ。すごく大きいんですよ。ここだけでも60万人いるので、大規模な形で支援を行なっています。

もしさらにWFPのことにご興味があれば、日本事務所がソーシャルメディアを使っているいろいろな情報も出していますので、見ていただければと思います。

また、FOODDeliverというのもありまして、これを通していろいろな情報も取れますし、スマホを通して募金もできます。スマホでFOODDeliverのアプリをダウンロードすることも可能となっています。

### 【国連職員を目指す皆さんへ】

最後にキャリアのことについてお話しさせていただきます。私自身はICUを卒業し、そのまますぐにオーストラリア国立大学で国際関係論の修士を取りました。最初は普通に日本企業に就職して、そのあとやっぱり国連職員になりたいという気持ちがあったので、とりあえずJPOを目指そうと思いました。JPOはジュニア・プロフェッショナル・オフィサーといいまして、外務省が行なっている試験で、2年間国際機関に日本政府のお金で派遣されるというシステムです。これは国連職員として派遣されるのと、これで派遣されるとその後正規職員に残る可能性が高いので、まず私はJPOの試験に通ることを目標として、大学院を出た後にキャリア設計を立てました。私の場合は普通に企業に就職して、そのあと現場で活動してみたいと思ったので、NGOとか、あと国連ボランティアで東ティモール、コソボ、イラクで3年間修業をする機会があり、そうこうしている内にJPOの試験に通ってWFPに派遣されました。私がなぜWFPを選んだかという、たくさん国際機関があるのですが、大きな人道支援機関で働きたいと思ったのと、組織が大きいとチャンスといいますかいろんなところで働ける機会も多いと思ったのと、あと食料支援を通して教育、貧困、人々の収入向上、環境、栄養問題、多岐にわたって多くの成果を上げることができるので、そういったところに分かりやすいというのと、達成感が感じやすいというのに非常に魅力を感じてWFPを選びました。特に昨今紛争ということを考えてみると、紛争と平和、紛争と平和解決に対する食料支援、飢餓問題の解決というのが密接につながっているということもありWFPを選び、もうかれこれWFPに勤めはじめて17年がいつの間にか経ってしまいました。私自身は最初ローマ本部から始めたのですが、そのあとブータン、スリランカ、日本、シエラレオネ、ミャンマー、また日本勤務をしています。私みたいな国際職員、プロフェッショナルスタッフになるとローテーションがあるのでわりと異動があります。異動したくない人は国連の中でもいろんな契約があるので、そういう異動をしなくてもいいような契約、コンサルタントだとか、一般職員っぽい契約だとかを選ぶ方もおられます。職種はかなりたくさんあり、私はどちらかというとマネジメント系、調整とかプログラムですね。プロジェクトをまわすだとか、そっち系の職種できています。ただ今WFPの活動を見て、皆さんももしかしたら感じたと思いますけども、いろんな切り口がありまして、イノベーションだとかもやっていますので、そっち系の技術がある人。いわゆるITという情報通信だとか、エンジニアだとか、灌漑設備とかもやっていますので、農業系とか、調達、物流、営業、あとかなり調査とかをしないと食料支援をできないので、本当に必要な人を調査して必要な地域で食料支援を行なっているの、そういった調査をするための、いわゆる統計とかそういったことができる人だとか、あと財務、法律系などさまざまな職種があります。

先ほどお見せしたように現金といいますかeバウチャーみたいに引き換えて食料支援というのも行なっているの、金融だとか、いろんな切り口がありますので、いろいろなところから当方に入って来る方がおられます。日本でいうといろんな企業のご出身の人もいれば、省庁から来た人もいるし、JICA、青年海外ボランティアとかしていたとかいう人もいますし、NGOの人もいますし、いろんな職種の人がいます。語学ですけども、契約体系にもよるんですね。ただ私みたいな国際プロフェッショナル

ルスタッフという国際職員だと、2カ国語がやはり必要となっていて、英語ともう1カ国が必要。ただ私もJPOとして始めましたけども、もしJPOになったらJPOとなった2、3年の間に2カ国語をマスターするチャンスがありますので、JPOになるときに2カ国語が、英語はとにかく必要ですけども2カ国目がベラベラじゃないとJPOになれないということはないです。私もJPOになるときは英語で試験を受け、2つ目の言語はスペイン語で国連公用語の試験は通ったんですけども、それはJPOを3年してその最中に取りましたので一応猶予はあります。英語ですけども、私は別に帰国子女でも何でもありませんし、別にそんなに自分が最初からベラベラだったかなとあんまりそうでもなく、国連に入ってからもっと英語を勉強したくらいなので、ただ意思疎通とやりたいこと、人が言っていることを聞く能力というのはもちろん必要なんですが、いわゆるネイティブスピーカーみたいにベラベラ喋れなければいけない、絶対というわけでもないです。専門性だとか語学だとかそういう技術力がないと駄目なんじゃないかと質問が多いのですが、もちろんそれはそれであったに越したことはないのですが、そういうのは後からでも身に付くもので、私はむしろ国連に入ってからかなり勉強しまして、特にWFPという組織は、私は体育会系ではなかったんですけども、結構体育会系っぽいイメージの組織で、要するに仲間意識が強くて、仲間みたいな感じで気に入ってもらったら面倒を見てくれるといいますか、そういう面倒見がいいというか人情味がある組織でして、国連の中ではあんまり官僚っぽくない組織なんですね。ですからやる気があつてすごいがんばり屋で伸びしろがある人には投資するという組織なので、私は別にそんな最初から幹部とかできるとか自分も思ってなかったし、全然特にすごく秀でたものがあるとはむしろまったく逆くらいに思ってたんですが、結構任せてくれるというか、私もいろいろブータンに行ったりスリランカに行ったり日本に行ったりミャンマー行ったりシエラレオネなどあちこち行ってますけども、その行く先々で最初から経験があったわけじゃなくて、特に副代表をやったときにはそんな仕事をやったことなかったし、大丈夫なんだろうとか、事業統括者なんかで行って大丈夫なんだろうかと最初は思ったんですけど、やってみると、がんばりなさいという感じでチャンスを与える組織で、投資してくれました。

自分でそれなりに創造力を使ってリーダーシップをもって何かをやりたいという人には非常に向いていて、お前は若いから平だから黙っとけとか、そういうのもなくて、何かアイデアを出してやりたい、自分がこのプロジェクトを動かしたいというのを見せるとやれやれみたいな感じでチャンスを与えるので、私はどちらかというとなめられて伸びるタイプなので、そうやって伸ばしてもらったのもあったのです。ですから今回日本事務所代表ですけども副代表のときも代表のときも、多分ポジションにしてはわりと歳が若いかもしれないですけども、でもそういう年功序列ではないので、若くてもチャンスを与える、そういった組織で非常にやりがいも感じています。ですからただ単に貧困解決をしたいとか飢餓問題を解決したいとか途上国でとか、そういう使命感だけではとてもじゃないですけども続けられてきたとは思えなくて、チームの中で必要とされているとか、上司部下に必要とされて伸ばしてもらって投資してもらえとか、そういうのが嬉しいとか、まったく未熟だった私を成長させてくれたとか、そういったところに非常にやりがいを感じているので、そういった、何て言うんですかね、チャレンジなところがあっても続けていく原動力になっているのではないのかなとは思いますが。求められる素質や人は、調査して必要な地域で食糧支援を行なっている、そういった調査をするための、いわゆる統計とかそういったことができる人だとか、あと財務、法律系などさまざまな職種があります。空気を読むじゃないですけども、人とやっていく力、コミュニケーション力というのは、ただ単に自分の言いたいことをベラベラ喋れる人というのではないので、人の言うことをちゃんと聞いてそれをもって自分のことも伝えて、そういう聞く力がある人、そういったコミュニケーション力というのが求められています。語学力もある程度は必要ですけども、ちゃんとコミュニケーション力を踏まえた意味での語学力というのが大事になってきていると思います。結局のところいろんなところで知らないことに出くわすことも多いので、最終的には総合力というのが大事だと思います。私という総合力というのは結局応用できる力なので、今学生の時代に皆さん

できることとして、とにかく幅広くいろんなことを勉強するというのがいいと思います。そうすることによってどこかで考える力、聞く力というのをいろいろと授業を取って、ディスカッションなりペーパーを書いたりするときに、そういった力を身に付け、それが応用力につながるのではないのかなと思っています。また学生の方は部活動をやったりバイトをやったりとかそういったこともあるかと思いますが、そういう社会経験を通じて、人ともめたりすることもありますけども、そういったところで人を引っ張ったりとか人と仲良くしたりだとか、喧嘩をしたときにどのように仲裁するだとか、そういったことも自然に身に付いてくると思うので、授業以外での経験も今大事にしていて、そういったことが将来的に生きてくるのではないのかなと思います。ご清聴ありがとうございました。